身体の具合がデザインを気づかせる

武蔵野美術大学 造形文化・美学美術史 教授 柏木 博

わたしたちは好みのデザインの生活用品を選択し、それぞれが快適と感じる生活空間の中で生活している。しかし、ちょっとしたきっかけで、それまでの快適な空間が暮らしづらいものになったり、道具を変えることで快適な生活ができるようになることがある。今回は、近代デザインを通して近代社会と人々の意識や思考、感覚を分析することを研究テーマとしている武蔵野武術大学の柏木博教授に、障害者や高齢者など社会的弱者のためのデザインという概念について寄稿をお願いした。

ふり返ってみると、身体の具合が悪いときに、その悪い部位の存在を強く意識するようだ。そして、それを補うような身の動きをする。たとえば、だいぶ以前のことだけれど、左の手首に異様な激痛が走り、腕時計すら着けられなくなってしまったことがある。整形外科に行ったら、石灰の沈着が原因だとのことだった。その時、いままで意識したこともない、患部の左手首のでっぱり（尺骨茎状突起）の存在を強く感じた。そして、時計を右の手首に着けた。すると、左手で時計の装着をしなければならず、これが、右利きのわたしにとって思いのほか難儀だということに気づく。身体に不具合が生じたときに、わたしたちは身体の機能性に気づくことになる。

左利きの人たちが、右利き用につくられた道具に違和感を持っているのではないかということに、気づくのも、こうした状態になったときなのかもしれない。

道具の使いにくさや、環境への違和感を感じるのは、わたしたちの身体や気分が萎えて、弱くなっているときだ。自身の健康状態が低下したときにしか気づかないかもしれないが、実のところ、そうした事態の中で気づかれた問題が、デザインの本質的な問題のひとつだといえるだろう。

このことは、デザインがもたらす心地良さといったことにかかわっている。使い心地の良い家具、着心地の良い衣服、住み心地のよい住まい、読み心地の良い書物などといったことだ。その心地良いデザインを丁寧に実現していくためには、強者の視点をいったん捨ててみる必要がありそうなのだ。わたしたちの身体や気分の力が低下しているときにこそ、センサーとしての身体が道具や環境の不具合に気づくからである。

●デザインが与える影響

生活環境のデザインが、わたしたちに与える影響は少なくない。手短なところでいえば、家具や部屋（室内）のデザインは、わたしたちの生活に大きくかかわっている。

弱視児童のための机

わたしの個人的経験だが、２００３年、間伐材で、養護学校の生徒のための学習机と椅子（デザインは丸谷芳正）を開発した。それは、いわゆるバリアフリーとか、一時話題となったユニバーサル・デザインなどの手法では対応できない児童にむけたものだった。目を近づけないと文字を読むことのできない極度の弱視の児童や、机から鉛筆が転げ落ちたときに、それを拾うことのできない児童のための机といった、きわめて深刻な障害を持つ児童のためのデザインだった。

障害者や高齢者のためのバリアフリーという考え方もあるが、しかし、それ以前に、部屋のデザインそのものが、複雑な影響をわたしたちに与えているように思える。

たとえば、画家のヴァン・ゴッホは晩年にサン・レミの病院ですごしている。ゴッホは、その病室の風景

右 ゴッホが1889年の数カ月間を過ごしたサン・レミのサン・ポール精神病院の一光景。力強い色彩と筆致で看護夢内の孤独シスターと患者が描かれている。

下 オーヴェールで過ごした数週間の間に、ゴッホは村の風景や見うの姿を描いた多くの作品を残した。このイ〈オーヴェールの教会〉は1890年6月に制作された。彼は言う。「一緒にかき空の深じりけがない深い青を背景に、教会は青紫に浮まれて見えます。ステンドグラスの窓が青紫に染うられた点のようです……」

自らを傷つけたゴッホは2週間入院した。そして翌89年2月には幻覚に襲われ、ふたたび入院しなければならなかった。その年5月から1890年5月にかけて、ゴッホはふすずからの悪思で、アルルから数マイルのところにあるサン・レミの精神病院に入院する。原因がはっきりつかめない発作の合間には、油絵とデッサンにうちこみ、病院構内の眺めや病院職員の肖像を描いた。

死への旅路

1890年5月、旅行ができるほどの健康を回復したと感じるとゴッホは、印象派の画家カミーユ・ピサロの以前からの勧めにしたがって、パリ北方の画家が多く集まっている村オーヴェールに住むことにした。そこに移る途中、弟テオのもとを訪れるためパリに立ち寄る。テオには男の子ができたばかりで、その子には伯父の名前をとってフィンセントと名づけられていた。オーヴェールの村では、ポール・ガッシュが治療に当たってくれた。ピサロや他の画家たちの友人で芸術愛好家でもあったこの医師のもとで、はじめのうち、ゴッホは満ち足りて過ごすことができた。しかしそのうちに病気がぶりかえし、1890年7月27日、いつまでたっても治らないことに絶望して、銃で胸を撃って自殺を図った。2日後、彼は静かに息をひきとった。かたわらではテオがその最期をみとった。37歳であった。弟テオはそのわずか6カ月後に世を去り、オーヴェールの村には兄弟2人がならんで埋葬されている。

39

ゴッホ、サン・レミの光景